

好忠集と勅撰集

―部立・詞書・作者名表記を中心に―

深谷 秀樹

一 はじめに

曾禰好忠は、平安時代中期に活躍し、異色歌人といわれた人物である。好忠の和歌は、家集・好忠集（曾禰好忠集・曾丹集とも）に五八六首（尚書禪門本）が収められている。その中から勅撰集に入集した歌、及び家集不載歌で好忠詠とされた勅撰集歌を合わせると約一〇〇首ある。本稿では、それらの勅撰集入集歌について、主として部立・詞書・作者名表記の異同を検討し、それを通じて、家集における歌の性格（位置づけ）が、勅撰集においてどのように扱われているかを考察し、好忠歌の享受の一端を明らかにすることを目的とする。

なお、勅撰集に和歌が入集される際には、部立による分類・詞書の付与・作者名表記の記述および和歌本文といった要素に関して、撰者の裁量において決められることによつて、原作者の意図しない形となつて歌が収められることもままあ

るということを、はじめに確認しておきたい。それに対し、家集に現れた歌の姿は―後人による他撰本は別として―原作者の意向をそのまま反映していると考えられるのである。このような観点に立つて、以下、考察を進めていきたい。

一 好忠集の構成

まず、勅撰集の部立と比較するために、好忠集がどのように構成されているか触れておきたい。

好忠集は、大きく分けて、毎月集（三百六十首和歌）及び百首歌（好忠百首・順百首）という、二種の定数歌から成り、それに「つらね歌」と補遺歌が加わる。それらは次のように構成されている。

毎月集三百六十首和歌 〈三六八首〉

春の長歌・反歌 〈各一首・計二首〉

一月上〜三月下 〈各一〇首・計九〇首〉

夏の長歌・反歌 (各一首・計一首)

四月上〜六月下 (各二〇首・計九〇首)

秋の長歌・反歌 (各一首・計二首)

七月上〜九月下 (各二〇首・計九〇首)

冬の長歌・反歌 (各一首・計二首)

十月上〜十二月下 (各二〇首・計九〇首)

好忠百首 (一〇二首)

序

春中・夏十・秋中・冬十・恋十

(各二〇首、但し春十のみ一首・計五二首)

杳冠歌 (安積山・難波津) (三二首)

物名歌 (千支・方位) (二〇首)

つらね歌 (一四四首)

源順百首 (構成は好忠百首と同じ、但し春十と物名歌が

一首ずつ少ない) (一〇〇首)

補遺歌 (三首)

右のように、毎月集・百首歌においては、勅撰集に匹敵するといつてよいほど歌が緻密に部類分けされており、好忠が意図した個々の歌の性格を明確に把握することができる。それゆえ、勅撰集の部立との対比が可能となるのである。

三 毎月集における勅撰集入集歌

それでは、続いて勅撰集入集歌の検討に入りたい。

毎月集の中で勅撰集に入集している歌の一覧は、(表1)に示した通りである。その歌数は六三首で、勅撰集入集歌全体の六割強を占めている。これらの歌について、部立・詞書・作者名の三点から考えていきたい。

(1) 部立について

毎月集は、その性格を藤岡忠美氏が「日記的な歌集」と規定されたように、一月の上(はじめ)から十二月の下(おわり)まで、合計三六〇首で構成されており、たとえば七月の七首目に七夕の歌、九月の九首目に重陽の歌を配置するなど、一年間の暦に対応した歌の配列がなされている。したがって、これを勅撰集の部立でいえば、春・夏・秋・冬の四季部に該当すると、一応は考えてよいであろう。すると、毎月集の入集歌六三首の殆どが、対応する季節の部立に収められていることがわかる。

なお、拾遺集に入集した歌のうち、七月下の二〇九番歌・八月下の二三九番歌の二首は、雑秋部に収められている。拾遺集で初めて設けられた、雑春・雑秋・雑賀・雑恋といった部立について、小町谷照彦氏は「内容の多岐に渡るもの、発

想や表現が特異なもの、遊戯的傾向の強いもの、日常的・散文的なものを弁別した」とされ、雑秋の場合、単なる秋部と一線を画した歌であるといえる。いま問題としている二首の場合、二〇九番歌は

むつまじきいもせのやまとしらねばやはつあきぎりのた
ちてへだつる

という歌で、妹背山に立つ霧を、男女の仲を隔てるものとした趣向を独特なものと解したのであろう。また、一三九番歌は

あきかぜはまだきなふきそわがやどのあばらかくせるく
ものいがきを

という歌で、我が家の荒れ果てて隙間だらけであることを隠している蜘蛛の巣を吹き破るなど、風に呼びかけている。我が家をあばら家と称するところなど、和歌には稀な日常詠とみただのであろう。こうした歌を、拾遺集撰者は一般の秋歌と区別していたということである。ただし、好忠の場合、特異な表現を用いた詠歌は多く、その中で右の二首のみが雑秋部に入れられたことについては、なお検討の余地があろう。

次に、四季部であるが、季節がずれた例として、冬・十月上の二八三番歌、

くさがれの冬までみよと露じものおきてのこせるしらぎ
くのはな

が、詞花集の秋部に入っている。この歌は、詞花集では菊の歌群の一首として扱われているのである。

続いて、四季部以外に入集した歌として、恋部に収められた歌が九首（二二・一四二・一六〇・二二二・二二三・二三四・二三六・二九一・三〇八）、雑部に収められた歌が三首（二五・一〇九・三三二）ある。恋部に収められた歌は、

かたをかのゆきまにきざすわか草のはつかに見えし人ぞ
こひしき

わがせこがきまぬよひのあきかぜはこぬひとよりもう
らめしきかな

のように、四季歌の要素を持ちながら、恋の要素をも併せ持った歌である。勅撰集撰者は、両者のうち、恋の要素の方を重視して恋部に配置したのである。

また、雑部に収められた歌は、

あさみどりやまはかすみにうづもれてあるかなさかの身
をいかにせん

かはかみやあふちのいけのうきぬなはうき事あれやくる
人もなき

ふかくしもたのまざるらんきみゆゑにゆきふみわけてよ
なよなぞふる

の三首であり、一首目は「あるかなさかの身」といつてはかない身の上を憂い、二首目は「うき事あれや」と相手が自分

に対していやなことがあるのかと案じ、三首目は自分の誠意が報われないことを詠んでいる。いずれも、単なる四季歌とは異なった趣向を有しているといえるのである。

以上、入集歌の部立を通して考察したことをまとめると、毎月集の和歌は、曆に従って配列された四季歌の要素を持ちながら、単純な四季歌と解し得ない歌をも包含しているといふことができる。それが四季以外の部立に入集する歌がある要因となっているのである。

(2) 詞書について

続いて、詞書について考えたい。表で明らかのように、毎月集の入集歌の殆どが「題知らず」であり、具体的な詠作事情は示されていない。しかし、好忠の歌を最初に収めた拾遺集に、「三百六十首の中に」と記された詞書があることは注意を要する。これはすなわち、拾遺集が依拠した好忠歌の撰集資料が、既に毎月集三百六十首和歌の形にまとめられていたことを意味している。

また、それ以外に詞書を有する歌は、いずれも歌の主題を示したものと考えられるが、二五番歌の続後撰集での詞書は「春歌の中に」とあり、撰集の際の原資料の姿を示唆するものであるが、それが毎月集の形であったかどうかまでは、この詞書からは判断できない。

(3) 作者名表記について

次に作者名表記を見よう。毎月集の入集歌の中では、一首を除いて全ての歌が「好忠」（もしくは「曾禰好忠」）の作者名を有している。唯一の例外は、拾遺集で「詠み人知らず」とされた二〇九番歌である。この歌は拾遺集では雑秋に収められているが、同じ巻にもう一首好忠の歌（三三九番歌）が入っており、そちらは「三百六十首の中に 好忠」となっているだけに、同じ資料（毎月集）から採歌したと思われる二〇九番歌が「詠み人知らず」であることは、不審というほかはない。

四 百首歌における勅撰集入集歌

続いて、百首歌（好忠百首および源順百首）からの入集歌について、〈表2〉に基づいて考えていきたい。

(1) 部立について

まず、春十・夏十・秋十・冬十・恋十は、それぞれ勅撰集の同じ部立に対応するとみてよいであろう。すると、順百首の冬十の歌（五一五番歌）が続古今集の恋一に入集しており、歌の扱いが異なっているが、他の歌はいずれも百首歌どおりの分類で入集している。

続く杵冠歌は、三一首並べられた歌の最初の一文字を順に

たどっていくと「あさかやまかげさへみゆるやまのゐのあさくはひとをおもふものかは」という歌になり、最後の一文字は順に「なにはづにさくやこのはなふゆごもりいまははるべとさくやこのはな」の歌になるといふ、きわめて特殊な技巧である。この杵冠歌からは、好忠百首で四首（雑と恋に二首ずつ）、順百首で一首（恋）が入集しているが、杵冠歌として読むためには、当然三一首が揃っていないなければならないので、勅撰集においては、技巧歌としての性格から離れ、一般の歌として享受されているのである。これは、家集と勅撰集とで、歌の性格が異なっていることを意味するが、別の見方をすれば、技巧歌でありながら、一般の歌としても十分鑑賞に堪えうるということを表付けることにもなり、好忠・順の歌人としての力量を示すものである。

最後の物名歌は、そのまま勅撰集の物名部に対応する。しかし、好忠百首の二首（冬・雑）と、順百首の三首（恋・賀・雑）が、物名以外の部立に入っている。しかも、順百首の歌は、詞書によって全く別の詠歌事情が付け加えられているのである。したがって、これら四首は物名歌としての性格を排除した形で享受されているわけだが、先の杵冠歌同様、技巧を別にしても勅撰集に入集するだけの価値がある歌だということを示しているのである。

(2) 詞書について

毎月集と同じく、百首歌からの入集歌についても、勅撰集で「題知らず」とされているものが殆どである。詞書が付与された例としては、順百首・夏十の歌に「夏歌中に」と記したものの、物名歌として、隠された題を示したものがある。また、前述したように、物名歌でありながら、別な詠歌事情を示した詞書が付された例がある。

(3) 作者名表記について

作者名についても、その殆どが「好忠」の作となっている。ただ一例、好忠百首・秋十の三九三番歌が、新古今集では「躬恒」となっている。この歌は躬恒集にはみられないので、この作者名表記は不審である。

もう一点考慮しなければならないのは、順百首の扱いである。現在の研究では、順百首はその名の通り源順の作と考えられているが、かつては好忠作とする見方が一般的であった。勅撰集の作者名表記も二通りに分かれており、順百首からの入集歌八首のうち、順の作とするのは玉葉集の二首のみ^⑤、他の勅撰集撰者は好忠の作として扱っているのである。

五 勅撰集入集に関する諸問題

ここまで、好忠の勅撰集入集歌について、家集との比較を行なってきた。続いて、勅撰集入集に関する若干の問題について触れておきたい。

(1) 補遺歌・家集不載歌からの入集

毎月集・百首歌以外に、勅撰集に入集している歌としては、家集末尾に付け加えられた補遺歌の中に、拾遺集入集歌が一首みえる。補遺歌という性格上、好忠集に初めから存在した歌ではなく、拾遺集によつて補われた歌と考えられよう。

また、好忠集にみられず、勅撰集で好忠作とされている歌が三首と、勅撰集では「詠み人知らず」だが、歌合において好忠の作とされている歌が一首ある。これらの歌から、現存している好忠集以外に、勅撰集の撰集材料となった何らかの資料の存在が想定される。

(2) 部立別の入集歌の分布

次に、勅撰集入集歌について、部立別の入集歌数を(表3)にまとめた。これを見ると、四季歌の割合が全体の約七割を占めていることがわかる。これは、入集歌の多くが毎月集の歌であり、若干の例外を除いて、それらの歌が四季部に収め

られたことによつていられる。また、四季の内訳では、春・夏に比べて秋・冬の割合が高いが、これは、好忠の歌風として、身の不遇を嘆く歌や、独り身のわびしさを詠んだ歌が特徴的であることと関わるのではないかと思われる。飽くまでも印象であるが、秋・冬という季節がもつ寂しさ・切なさといった要素が、好忠の歌の特質に重なるように思うのである。そのため、秋・冬の歌にすぐれた歌が多く、それが勅撰集入集歌において、数値的に現れたのではないだろうか。

(3) 重出について

続いて、勅撰集間での重出について考えたい。勅撰集においては、原則として同じ歌が複数の集に採られることはないが、例外的に重出している歌が存在する。好忠集では六例みられる。これらのうち、五例までが金葉集⑤に関係していることに注意したい。七・二〇・一三三番歌は、金葉集に入集しながら、後代の集で再び採られた例であるが、これについては、好忠の金葉集入集歌が初度本もしくは三奏本への入集(両者に重複する歌もある)であつて、流布本である二度本には入集していないこと⑦に関わる。すなわち、後代の勅撰集撰者が、二度本の金葉集を参看しながら撰集作業を行なったとすれば、好忠のどの歌を採ったとしても、先行の集には抵触しないことになるのである。それとは逆に、三六一・三六

四番歌は、既に拾遺集に入集しているにも関わらず、金葉集（初度本・三奏本とも）に採られた例である。こちらは金葉集の撰集作業上の問題ということになる。

六 おわりに

以上、まとまりのつかないものとなったが、好忠集の享受について、勅撰集への入集という観点から考察してきた。まず、家集と勅撰集との比較の結果、好忠集にあつては、大部分の歌が、家集における性格のまま勅撰集で享受されたといつてよいのではないかと思う。その要因としては、好忠集が定数歌の形にまとめられ、家集において既に緻密な分類が施されていたことが大きい。一方で、撰者の意向によつて、家集とは別の形で享受されるに至つた歌も存在したことが確認できた。

もう一点、勅撰集を通して好忠が後世どのように評価されたかを考えてみると、好忠の歌の評価は、決して低いものではなかったということができよう。とりわけ、技巧を駆使した歌である物名歌や杵冠歌の中に、一般の歌としても鑑賞に堪える歌があつたことは特筆すべきである。こうした歌を作る場合、技巧に気を遣うあまり、歌としての完成度が低くなつてしまうことがままある。そのような制約下にあつてもなお、勅撰集に採られるほどの歌を作ることができたのは、

やはり好忠の歌人としての力量がすぐれていたからだといえるのである。

さて、今回触れ得なかつた点として、家集と勅撰集における本文の問題がある。この点を考察することで、各勅撰集の撰者が用いた好忠集の本文（伝本）がある程度特定できるかと思われるのであるが、それについては今後の課題とし、本稿はここで終りとしたい。

（二〇〇三年三月）

注

- (1) 藤岡忠美氏「曾禰好忠「毎月集」の日記性について」〔平安和歌史論―三代集時代の基調―〕 桜楓社 一九六六年二月。初出は『日本文学』 第七巻七号 日本文学協会編集・未来社刊 一九五八年七月。
- (2) 年中行事との関連については、藏中スミ氏「曾丹集あれこれ（三）―毎月集と年中行事―」（『水門―言葉と歴史―』 第七号 水門の会 一九六五年八月）に詳しい。
- (3) 『新日本古典文学大系7 拾遺和歌集』（岩波書店 一九九〇年一月）の解題による。
- (4) 藏中スミ氏「曾丹集の一つの問題―曾禰好忠作百首和歌といわゆる源順作百首和歌―」（『和歌文学研究』 第二五号 一九六九年二月）など。

(5) この玉葉集の作者名表記の扱いについて、契沖は「玉葉集に順の哥とて、載せられたるは、よくわかまへられたり」と指摘している（神作光一先生・島田良二氏編著『校注曾禰好忠家集へ契沖本』 桜楓社 一九六八年六月 七五頁）。

(6) 金葉集には、初度本・三奏本にそれぞれ六首ずつ入集しているが、うち三首が重複している。

(7) 好忠の歌が二度本に入集していない理由は、二度本が当代歌人の歌を中心に編纂されたことによる。

※ 本稿における和歌の引用は、歌番号も含め、すべて『新編国歌大観』（角川書店）によった。なお、特に断りのない限り、文中の歌番号はすべて好忠集の番号である。

【付記】

本稿は、神作光一先生のご在職中、大学院で開講されていた曾禰好忠集の演習に基づき、研究成果の一端をまとめたものである。先生のご学慮に対し、改めて深く感謝申し上げます次第である。

（本学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程三年）

〈表1〉 毎月集における勅撰集入集歌

好忠集		勅撰集					
季節	月	歌番号	歌集名	部立	歌番号	詞書	作者名
春	正月上	3	後拾遺	春上	42	題知らず	好忠
		7	金葉・初	春	12	はるのゆきをよめる	好忠
			金葉・三	春	9	はるの雪をよめる	好忠
	正月中	10	新拾遺	春上	41	題知らず	好忠
		20	金葉・初	春	31	百首歌中にわかなの心をよめる	好忠
			続後拾遺	春上	25	三百六十首歌の中に	好忠
	正月下	22	新古今	恋	1022	題知らず	好忠
		24	新勅撰	春上	21	題知らず	好忠
		25	続後撰	雑上	1036	春歌の中に	好忠
	二月上	39	新勅撰	春上	19	題知らず	好忠
		51	新古今	春上	77	題知らず	好忠
		53	新後拾遺	春上	53	題知らず	好忠
夏	四月上	95	後拾遺	夏	169	題知らず	好忠
		104	新古今	夏	187	題知らず	好忠
	四月中	109	後拾遺	雑	872	題知らず	好忠
		110	後拾遺	夏	220	題知らず	好忠
		113	風雅	夏	426	題知らず	好忠
	五月上	125	新後拾遺	夏	278	題知らず	好忠
		132	後拾遺	夏	204	さなへをよめる	好忠
			金葉・三	夏	144	納涼のころをよめる	好忠
	五月中	142	詞花	夏	76	題知らず	好忠
		157	詞花	恋下	247	題知らず	好忠
	六月上	160	詞花	夏	78	題知らず	好忠
		172	新古今	恋	1070	題知らず	好忠
六月中	172	後拾遺	夏	227	題知らず	好忠	
	180	詞花	夏	81	題知らず	好忠	
秋	七月上	187	詞花	秋	82	題知らず	好忠
		191	新古今	秋上	343	題知らず	好忠
		192	新古今	秋上	311	題知らず	好忠
	七月中	198	新勅撰	秋上	193	はつ秋の心をよみ侍りける	好忠
		200	新千載	秋上	318	題知らず	好忠
		205	詞花	秋	118	題知らず	好忠
	七月下	208	新古今	秋上	371	題知らず	好忠
		209	拾遺	雑秋	1095	題知らず	不知
	八月上	221	続後拾遺	恋四	905	恋歌とて	好忠
		225	拾遺	秋	188	三百六十首の中に	好忠
	八月中	233	続後撰	恋四	928	恋の心を	好忠
		234	拾遺	恋三	833	三百六十首の中に	好忠
236		続古今	恋四	1267	題知らず	好忠	
八月下	238	新勅撰	秋下	322	擣衣の心をよみ侍りける	好忠	
	239	拾遺	雑秋	1111	三百六十首の中に	好忠	
九月上	242	後拾遺	秋上	273	題知らず	好忠	
	247	新後拾遺	秋下	439	題知らず	好忠	
	251	新古今	秋下	535	題知らず	好忠	
九月中	259	拾遺	秋	213	題知らず	好忠	
	264	詞花	秋	133	題知らず	好忠	
九月下	269	新古今	秋下	529	題知らず	好忠	
	270	新千載	秋下	552	題知らず	好忠	

冬	十月上	279	詞花	冬	140	題知らず	好忠
		283	詞花	秋	129	題知らず	好忠
		288	新勅撰	冬	366	題知らず	好忠
	十月中	291	続拾遺	恋四	1020	題知らず	好忠
		292	詞花	冬	147	題知らず	好忠
	十月下	300	金葉・初	冬	399	百首歌の中に冬の心をよめる	好忠
		301	新古今	冬	619	題知らず	好忠
		304	金葉・初	冬	427	題知らず	好忠
			金葉・三	冬	304	水鳥をよめる	好忠
	308	続古今	恋四	1036	題知らず	好忠	
	十一月上	309	新続古今	冬	701	冬の歌の中に	好忠
	十一月中	319	後拾遺	冬	421	題知らず	好忠
		320	新古今	冬	681	題知らず	好忠
		322	新古今	冬	601	題知らず	好忠
		323	新勅撰	冬	428	題知らず	好忠
	十一月下	331	詞花	雑上	318	題知らず	好忠
	十二月中	357	新拾遺	冬	656	題知らず	好忠
	十二月下	361	拾遺	冬	1145	三百六十首の中に	好忠
			金葉・初	冬	432	題知らず	好忠
			金葉・三	冬	275	氷をよめる	好忠
		364	拾遺	冬	1144	三百六十首の中に	好忠
			金葉・初	冬	433	題知らず	好忠
			金葉・三	冬	292	百首中に冬の歌とて	好忠
	368	詞花	冬	160	歳暮の心をよめる	好忠	

〔凡例〕

- 本表作成にあたって、次の諸文献を参照した。
 - ・「勅撰作者部類」(『和歌文学大辞典』 明治書院)
 - ・神作光一先生『曾禰好忠集の研究』(笠間書院 1974年8月) 第3篇第1章「勅撰集所引の曾禰好忠歌」 183~197頁
 - ・神谷里美氏「曾禰好忠の歌風 その一 勅撰集入集歌について」(『愛知女子短期大学研究紀要 人文編』 第25号 1992年3月)
- 本表の歌の配列は、好忠集の歌順に従った。
- 歌番号は、好忠集・勅撰集ともに『新編国歌大観』(角川書店)に拠った。
- 勅撰集において、前の歌を受ける詞書や作者名表記については、特に区別せず示した。
- 作者名について、「曾禰好忠」「好忠」「そののよしただ」「よしただ」等はすべて「好忠」に統一した。また、「詠み人知らず」は「不知」とした。
- 金葉集は、初度本を「金葉・初」、三奏本を「金葉・三」とした。

〈表2〉 百首歌における勅撰集入集歌 付・補遺歌および家集不載歌

好忠集		勅撰集					
分類	歌番号	歌集名	部立	歌番号	詞書	作者名	
好忠百首	春十	371	新勅撰	春上	20	題知らず	好忠
	夏十	381	新古今	夏	186	題知らず	好忠
	秋十	390	新勅撰	秋上	206	題知らず	好忠
		392	新古今	秋下	495	題知らず	好忠
		393	新古今	秋下	499	題知らず	好忠
		394	新古今	雑上	1569	題知らず	好忠
		397	詞花	秋	110	題知らず	好忠
	冬十	402	詞花	冬	141	題知らず	好忠
		409	続後撰	雑下	1238	題知らず	好忠
	恋十	410	新古今	恋一	1071	題知らず	好忠
		415	後拾遺	恋四	775	題知らず	好忠
		416	続古今	恋五	1339	題知らず	好忠
	脊冠	430	続拾遺	雑上	1125	題知らず	好忠
		437	続後拾遺	雑下	1183	題知らず	好忠
		442	続千載	恋二	1242	題知らず	好忠
		450	詞花	恋上	230	題知らず	好忠
	物名	451	続千載	雑体・物名	722	きのえ	好忠
		452	続古今	冬	647	題知らず	好忠
		453	新続古今	雑下・物名	2056	ひのえ	好忠
		464	続後撰	雑下	1226	題知らず	好忠
順百首	夏十	500	続後拾遺	夏	227	夏歌中に	好忠
	冬十	515	続古今	恋一	1035	題知らず	好忠
	脊冠	554	新続古今	恋三	1221	題知らず	好忠
		568	続後拾遺	物名	501	ひのと	好忠
	物名	571	続千載	雑体・物名	723	かのえ	好忠
		577	玉葉	恋一	1317	恋のうたとて	順
		581	玉葉	恋四	1714	恋歌の中に	順
		585	金葉・三	賀	318	堀河院行幸ふたたびありける によめる	好忠
			詞花	雑下	383	円融院御時、堀河院にふたたび 行幸せさせ給けるによめる	好忠
	補遺	586	拾遺	雑下	526	なぞなぞものがたりしける所に	好忠
家集不載歌	拾遺	別	304	ものへまかりける人のもとに、 人人まかりて、かはらけとりて	好忠		
	拾遺	雑秋	1109	題知らず	好忠		
	新勅撰	春上	18	題知らず	好忠		
	新千載	冬	599	寛和二年殿上歌合に	不知		

※凡例は〈表1〉参照

〈表3〉 部立別入集歌数一覧

歌集名	四季	春	夏	秋	冬	恋	別	賀	雑	物名	計
拾遺	7			5	2	1	1		1		10
後拾遺	7	1	4	1	1	1			1		9
金葉・初	6	2			4						6
金葉・三	5	1	1		3			1			6
詞花	13	1	3	5	4	2			2		17
新古今	13	1	2	7	3	3			1		17
新勅撰	9	4		3	2						9
続後撰						1			3		4
続古今	1				1	4					5
続拾遺						1			1		2
玉葉						2					2
続千載						1				2	3
続後拾遺	2	1	1			1			1	1	5
風雅	1		1								1
新千載	3			2	1						3
新拾遺	2	1			1						2
新後拾遺	3	1	1	1							3
新続古今	1				1	1				1	3
計	73	13	13	24	23	18	1	1	10	4	107

〈凡例〉

- 「四季」は四季部の合計を示し、各季節ごとの内数を斜字で示した。
- 拾遺集の雑秋部は秋部へ含めた。
- 重出歌及び金葉集相互間の重複歌もそのまま数に含めた。